

堅固の覚悟これあるべく候」という秀吉の命令に背いて、持ち場を離れて豊前に移り、そのために、島津軍の進入を招いた責任を追及して仙石秀久に与えていた讃岐一国の知行を没収してしまった。関白殿下の軍が島津軍に敗れたという恥辱を、仙石権兵衛一人の責任に転嫁して、殿下の面目を保ち、秀吉の家臣たちへのみせしめとした。

黒田官兵衛・小早川隆景が渡海し、小倉城を包囲すると、十月四日、城主（城代）は降を乞うて赦され、高橋元種も降伏を打診してきたが、折り合わなかつたらしい（『吉川文書』『豊公遺文』）。

二 上方勢の豊前諸城の攻略

黒田孝高の 天正十四年（一五八六）十月十日以前に、まず長野統重が秋月氏と手を切つて京方に寝返り、**馬ヶ岳入城** 人質を出し、馬ヶ岳へ上方勢を入れることに同意した。続いて、山田・中八屋・広津鎮種・時枝鎮継・宮成吉左衛門らが、ぞくぞくと人質を差し出してきた。ただちに、中国勢をこれらの城々へ送りこんだ。彼らは長年、毛利氏と昵懇じっくの關係にあり、竜造寺氏が寝返り、島津軍が退去した段階で、上方勢に抵抗することの無駄を悟つたのである。秀吉は彼らには当知行とうぎょうを安堵した（『時枝文書』）。

宇留津城潰滅

十一月七日、中国勢は宇留津城を包囲し、「即時に切崩し」、城將加来孫兵衛以下千余人を討ち滅ぼした（第1図参照）。男女残らず「はた物」にかけられ、秀吉は「心知よき次第に候」と黒田ら中国勢へ書き送っている。

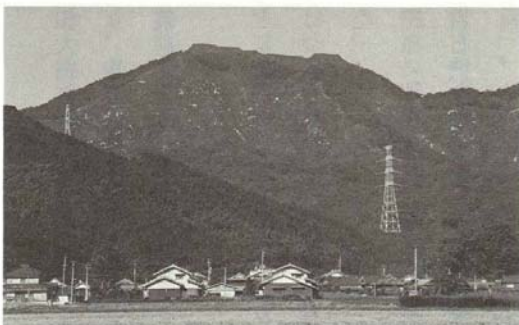
十一月十五日、障子ヶ岳城（勝山町）を攻略した（第2図参照）。城番は抵抗することもなく、夜闇にまぎれて下城したが途中で多数の者が討ち取られた（『小早川文書』）。

香春岳城開城

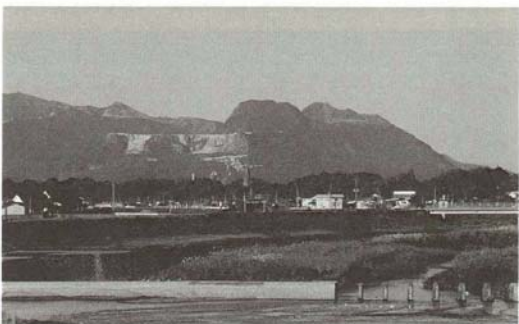
続いて、中国勢は香春岳を包囲して日を送り、十二月四日までに一の丸を占領し、十二月二十二日までに水手を押さえて、陥落も時間の問題となつて、高橋元種は森宍岐守吉成を通じて、命乞いし、香春岳を明け渡し、元種も一命を救^すされて、人質を差し出した。香春岳には森宍岐守が城番となつて、秀吉の動座を待つことになつた（第3図参照）。



第1図 宇留津城跡（椎田町）



第2図 障子ヶ岳（勝山町）



第3図 香春岳（香春町）
一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳
（左） （中） （右）

天正十五年（一五八七）一月二十八日、黒田孝高は、萩原民部丞ら豊前の国人たちへ秀吉の動座が近いこと、その際、挨拶に出頭すること、確かな人質を出すことを命じた。

秀吉馬ヶ岳城入城

三月朔日、京都を出発した秀吉は、ゆつたりと神社仏閣に参詣しながら

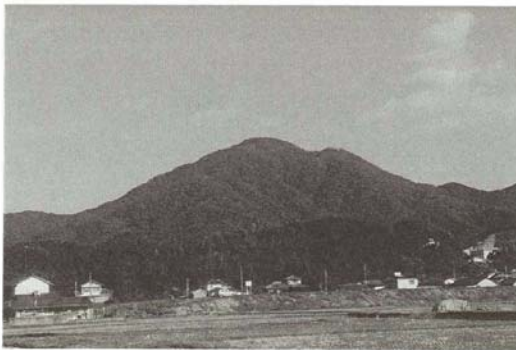
西下し、三月二十八日、小倉城へ入り、翌日には馬ヶ岳に入城した。

秀吉はここで軍勢を分け、弟の大和大納言秀長に中国・四国などの勢八万余を添えて日豊路を日向へ下り、秀吉自身は畿内の勢を中心とする一〇万余を率いて、田川郡から筑前へ入り、肥後へ向かうことにした。

彦山座主舜有は、かねて吉川氏などに降伏の仲介を頼んでいたが、年が改まってからは、一切これを受けつけられず、この日、使者をもつて降伏を願いだしたが赦されなかった。

岩石城潰滅

四月朔日、秀吉は伊田原に陣を進め、秋月氏の家臣熊井越中守が籠城する岩石城を細川忠興・前田利家らに命じて、一息に攻略させた（第4図参照）。この城は、前年暮れより大



第4図 岩石山（添田町）



秀吉の花押と朱印

兵をもって包圍し、秀吉の動座を待つて、その眼前で猛攻して、上方勢のすごさを見せ、九州の田舎武士たちへの見懲みこらしめとした。この城攻めの様子は、すぐ秋月種実の籠城軍にも聞こえ、種実も、秀吉軍が城下へ到着する前に、頭を丸めて、秘宝「檜柴」を捧げて命乞いし、命だけは赦された。秀吉は、あまり多くの犠牲の出ない小城を強攻して皆殺しさせ、上方勢の威力を誇示し、周辺を威圧するという手法を、このころは得意としていた。

三 九州征討の終わり

羽柴秀長への 秀吉はその後一気に薩摩境まで下り、五月
指示と豊前支配 八日、島津義久が自身「一命を捨て走り入

る」(『島津文書』)姿をみせたので赦免し、薩摩一国を宛行つて、九州征伐を終わった。

天正十五年五月十三日、秀吉は弟秀長へ次のような指示を与えた。①豊前の不要な城は破却し、馬ヶ岳城と豊後境の城(妙見岳カ)とが離れすぎているならば、その間に一城普請すること ②国々の者どもへ知行を与えるので、忠不忠を糺ただし、諸事油断なく申し付け、毎日でもこまごまと報告して、秀吉の指示



秀吉の弟 羽柴秀長の花押



島津義久の花押